

職業への距離認知に関する計量分析(1)

—— 距離認知の次元構造 ——

奈良女子大学 林拓也

1. 目的

不平等構造における人々が抱く自己地位の主観的な認知は、階層・階級帰属意識によって表されることが多い。こうした主観的地位は、客観的な地位と対応していることが想定されており、その中で重要な指標と目されるのが職業的地位である。しかしながら、客観的な職業的地位の効果は、期待されるほど強いものではないことが、しばしば指摘されてきた。このことは、自己の職業的地位の認知を捉えるのに、階層・階級に関するマクロ構造（上／中／下、資本家／労働者／中産階級など）を人々が共有していることを前提とすることの限界を示していると考えられる。

本研究では、このようなマクロ構造の共有性を前提とすることなく、職業認知の構造を把握するためのアプローチとして、社会的距離（social distance）の概念を応用した調査・分析を展開する。職業を対象とした社会的距離の研究は、ある個人がどのような職業（の他者）と近い／遠い関係にあるかという相対的にミクロな関係性の情報を得た上で、それらを集積したデータを分析を通して、職業間の距離構造を描き出してきた（Laumann 1966、Bottero and Prandy 2003）。職業に対する距離測定の基準に関して、客観的な交際関係や主観的な選好がよく用いられてきたが、ここでは上述の目的に照らして、「認知」の側面に限定しつつ、調査と分析をすすめていく。

2. 方法

使用データは、2013年に20～59歳の有職男女を対象として実施されたWeb調査：「職業イメージに関する調査」により得られたものを用いる。調査対象は、インターネットのモニター登録者の中から、性・年齢・職業に基づく割当法により抽出し、2000ケースを回収目標として配信した。最終的に有効回答を得られたケース数は2069であった。調査内容の中核である職業に対する距離認知は、評定対象として設定した36職業それぞれに対して、近い／遠いと感じる程度に応じた5段階評定を行ってもらった。そこで提示した36職業は、職種・従業形態や階層・階級分類を考慮した上で、可能な限りそれらを網羅できる職業群を選定した。

3. 結果

この第1報告では、職業への距離認知が全体としてどのような構造を有しているのかを、次元分解的手法により明らかにする。具体的には、回答者×評定職からなる距離認知データを、特異値分解にかけることにより、固有値の高い2次元を析出する。その2次元空間上に、評定職と回答者の双方を同時に位置づけ、さらに評定職・回答者の特性を表すデータも援用しつつ、追加的な分析を行った。その結果、次元空間上の職業の分化状態を表す極として、階層的地位による分離、性別による職域分離、官僚制組織／裁量労働の分離が確認された。

文献

Bottero, W. and K. Prandy, 2003, "Social Interaction Distance and Stratification," *British Journal of Sociology* 54-2: 177-197.

Laumann, E. O., 1966, *Prestige and Association in an Urban Community: An Analysis of an Urban Stratification System*, The Bobbd-Merrill Company.

【付記】本研究は、科学研究費補助金（平成24～26年度 基盤研究(C) 課題番号 24530625）の助成を受けたものである。